

「読み」と「語り」

——冥途の飛脚における——

“Yomi” to “Katari”

坂本(兼築) 清恵
Kiyoe Sakamoto (Kanechiku)

This article compares Chikamatsu's original script for Meido no Hikyaku with scripts for Edo-era revivals of this play and with modern Jōruri “Katari” scripts, examining in particular differences in linguistic aspects and interpretation.

一 はじめに

現行義太夫節を丸本と較べると、丸本とは異なった語りを聞く場合がある。その中には、言葉の変化によるものもあれば、本文の読み違いなどによるものもある。本稿は、「冥途の飛脚」を読むうえで解釈と語り方に関わる問題点について考察をしたものである。なお、現行の語り方を丸本どおりにするべきだということではない。

「冥途の飛脚」は、正徳元年（一七一）に初演され、文政三年（一八二〇）復活上演されている。天保七年（一八三六）に稽古本が出版され、現行浄瑠璃は、このあたりの語り方をテキスト

としていくという¹⁾。そこで、資料として、初演当時の丸本と、復活上演後の天保年間に刊行された稽古本・復活上演当時に刊行されたと思われる菊屋七郎兵衛版の丸本と、現在の語りをを用いる。相違点の考察という点からは、改作物の影響も考える必要があるが、細かい詞章面での共通点は指摘できないので、改作物との関係は取り上げない。

初演当時の丸本として、『近松全集』（岩波書店）所載の山本版八行本を用いた。（山八）諸本に特に比較の必要がない場合にはこれを代表させる。

山本版七行本（山七）『正本近松全集』勉誠社
復活上演頃の資料としては、菊屋版と稽古本を用いる。

菊屋版七行本（菊）早稲田大学演劇博物館蔵

「淡路町の段」（稽）大阪市立中央図書館蔵野澤吉兵衛遺文庫

綿屋喜兵衛・加嶋清助板 和田正兵衛筆五行

本（天保一二年刊三月初版か）

「新町の段」（稽）大阪市立中央図書館寄託鶴澤清六文庫 紙

屋與右門板

現行義太夫節として、次のものを用いる。

「淡路町の段」

豊竹織大夫（織）「CBSソニーレコード（昭和四六年五月）」

豊竹十九大夫（十）「昭和四七年二月」の語りを参考にし、両者の語りに違いがないものだけを取り上げる。

「封印切の段（新町の段）」

竹本越路大夫（越）「CBSソニーレコード（昭和四六年五月）」

豊竹嶋大夫（嶋）「NHK放送（昭和六一年）」

また、これ以外の近松作品の引用は、すべて『近松全集』（岩波書店）による。

二 解釈にかかわるもの

「二一」語彙の変化

「淡路町の段」で、駄荷が着き、堂島の屋敷に三百両を届けるという場面での忠兵衛の言葉で

①母者人わしはじきに此小判。おやしきへ持参する（山八14オ）

の「じきに」は、現行浄瑠璃では「すぐに」（織・十）と言いつえられている。「じきに」↓「すぐに」はどうして言い換えられたのだろうか。

現代語でこの二語は副詞として使われ、「薬が効く」をつけ

二

ると、「じきに」は徐々に、「すぐに」は即、という時間的な差異が感じられる。現在の感覚ではこの場面、催促された金を「すぐに」持参しなければならぬ訳で、この改変は納得がいく。

『日本国語大辞典』（小学館）などをみると、江戸時代の「じき」は「すぐに。まもなく。」の意味を持ち、現在よりも時間をおかないものであった。つまり、現在までに「じきに」が「即」よりも時間的余裕のあることばに変化したところから、〈即〉の意味を留めるために、初演当時の「じきに」から「すぐに」に語彙を改めて語るようになったと考えることができる。しかし、菊屋版は「じきに」のままであり、この改変は復活上演以降に起こったとみるほうがよさそうである。

近松の作品をみると、「じきに」は

イ、しやかだるまのいけんでも聖徳太子がじきにきやうけな

されても「冥途の飛脚」（山八21ウ）

ロ、お客さまはぶけうがほじきにあふていふこと有と「夕霧

阿波鳴渡」12オ

ハ、親の菅家もそこはかとなく余所の人丸たのまれずして。

ちきに大江のちさとをこへてすごきふかやぶ中おしわけ

て「鐘の権三重帷子」47ウ

ニ、いかにほうばいの念比とてちきには此ことしらせれずと

「堀川波鼓」20オ

ホ、直へちきにお咄へはなしあそばせと「鐘の権三重帷

子」16オ

へ、兄の不義の使に妹のうば来たそうな。直へぢきにあふも口おしい「鍵の権三重帷子」19ウ

とある。近松の作品では「じ・ち」の表記は混同しており、「じきに」「ぢきに」は同語である。これらの例は「あふ」「しらす」とともに用いられ、へ直接へ「あふ・しらす」ということである。へ即へという時間的な近さではなく、へじかにへという空間的な近さを表わす。それでは時間的に近いことを表わす言葉はなにかというと「すぐに」が用いられている。「冥途の飛脚」山本版八行本で例をみると

ト、是よりすぐに長堀迄参れば(11ウ)

チ、芝居からすぐに越後町の扇屋へいかんしたげな(17ウ)

リ、八右衛門がつらつきすぐに母にぬかすかほ(27ウ)

ヌ、毎日のおさんだんさきからすぐにお道場へ(34オ)

ル、こちの人は庄屋殿からすぐに道場へ参られ(40ウ)

ヲ、如来のおかげすぐに又道場へ参りて(42オ)

「いく・参る」とともに用いられ、へすぐにへ「ただちに」という意味である。例をみると、「すぐに」も「じきに」同様へ直接への意味もある。しかし、「じきに」が相手を目の前にしてという使い方をするのに対して、「すぐに」はある場所からある場所へ直接という使い方であり、あくまでも時間的にへすぐへというものである。

近松は「じきに」をへじかにへという空間的な近さに用い、「すぐに」をへすぐに・ただちにへという時間的な近さに用いて

いる。近松時代の「じきに」はへすぐにへの意味では使われていない。また、二のように「ぢきには」という例や

じきの咄を聞きしか共「夕霧阿波鳴渡」26ウ

のような例もあり、副詞としての使用ではない。

それでは、①を近松がどう使ったかであるが、「忠兵衛自身」が直接お屋敷に金を届ける」という意味で書いたのであろう。つまり、現行浄瑠璃の「すぐに」で語るのとは近松の意図するところとは異なることになる。

現行浄瑠璃で「すぐに」と語るのとは、「じきに」の意味上の変化によるものであるかもしれないが、現行浄瑠璃の語りのもとになったテキストが漢字表記だったためではないだろうか。稽古本には漢字表記で振り仮名がなく、「直に」とある。

「二二」音韻の変化

「新口村の段」で忠兵衛の父孫右衛門の言葉で

②みなあいつがこゝろから其身もせまいくをしをる

(山八39ウ)

があり、「忠兵衛自身、その身を世間から狭められて隠れまわり、苦しい思いをしている。」という解釈が行われている。「肩身が狭い」という慣用語もあることと、その前後の孫右衛門の言葉に「今では世間ひろうなり」「ひろいせかいをにげかくれ」とあることから、「身が狭い」という意味で考えられたものと思われる。しかし、この解釈には無理があるように思う。その理由は、「狭

い」を現在でこそ「ヘセマイ」というが、近松時代には「ヘセバイ」とバ行で示すことが普通であると思われるからである。

坂梨隆三氏に近松時代のバ行とマ行についての論稿があり、「狭い」は「ヘセバイ」が23に対し、「ヘセマイ」が1例であるという。例外である1例は、この「冥途の飛脚」例ではないだろうか。

室町時代の資料である『日葡辞書』にも「Xe bai」とあり、「その身もせまいく」は「狭い」以外の解釈がよさそうである。

そこで考えられるのは、「せまいく」は、サ変動詞+打消の意志の助動詞「まい」+「苦」で、「するはずもないような苦勞」という意味ではないだろうか。助動詞「まい」は、「まじ」から変化した言葉であるが、近松では両方用いられている。「まい」は、サ変動詞の未然形に接続し、「せまい」となる。当該例の他にも次のような例がある。

ア、いかふ気がめいるわつさりと浄るりにせまいか「冥途の飛脚」(山八17オ・山七20ウ)

この久米之介がある内はあなづらせはせまいが「心中万年草」3オ

「身も狭い苦」とは現在までにバ行からマ行への交替が起こったために生じた解釈といえる。なお、現行浄瑠璃では

百卅里を家にし江戸大坂を。ひろふせばふする亀屋(山八4オ)

を「ヘセボー」でなく「ヘセモー」とマ行で語る。

「二二三」表記と解釈

山本版八行本と山本版七行本とで、仮名遣いが異なるものがある。そのなかには、表記の違いから、異なった読みが可能となるものがある。

中之巻の最初の部分

③うはき鳥が月夜もやみも。首尾をもとめてあをふくとさ。

青あみ笠の。(山八15オ)

うはきがらすが月夜もやみも。首尾をもとめてあはふくとさ。あをあみがさの。(山八17ウ)

うはき鳥が月夜もやみも首尾をもとめてあをふくとさ。あをあみがさの。(菊12ウ)

うはき鳥が月夜も闇も。首尾を求めてなあをふくとさ。青編笠へあをあみがさの。(稽古)

傍線部分山本版七行をもとにした解釈では、鳥の鳴き声の「阿呆、阿呆」と「逢はう、逢はう」の掛け詞とある。

近松正本では「阿呆」は

あほうのたらく書ちらし「冥途の飛脚」(山八13オ・山七15ウ)

あほうらしいとひきのけて「冥途の飛脚」(山八41オ・山七52ウ)

おれはいかいあほうじゃ「夕霧阿波鳴渡」18オ

あほうじにといはれて「夕霧阿波鳴渡」13ウ

あほうばらひか切腹か「夕霧阿波鳴渡」14オ

のように「あほう」「あはう」の表記が用いられる。オ段長音の開合の区別が消滅後は、どちらも「アホー」と読むことができる。しかし、「あはふ」（山七）の表記からは「阿呆」の意味を読むことができるが、「あをふ」（山八・菊）からは「阿呆」を読み取ることができない。

「逢う」の未然形に意志の助動詞「う」がつき、近松の表記は「あはふ」となる。これは、未然形「あは」が「アアフ」と発音されていたところに「アウ」がつき、「アアフウ」↓「アアフー」と発音される。仮名遣いとしては、意志の助動詞以外が付いた場合には長音化しないために「あはふ」が保たれ、発音に近い「あをふ」が使われることはない。「あをふ」が採られている山本版八行本でも、ここ以外は「先お袋にあはふと」（8ウ）で、「あはふ」になっている。

つまり、七行本を「阿呆」と「逢う」の掛け詞とできても、八行本・菊屋本・稽古本ではこれを意味してはいない。八行本・菊屋本・稽古本では、「逢う」は文脈から理解できるので、ことさら「あはふ」と表記しなかった。「あをふ」と表記することにより、発音の「アアフ」に注目させ、次の「アアフアミガサ」を導き出すものとしていたのであろう。このあとに「身のうきしほで梅川も」「島屋をちよつと島かくれ」「おなじこととよとよ川に」のような同音の連続による趣向が続いている。また、現行浄瑠璃（越・嶋）でも「逢ふ」の部分を短呼して「アアフ」と強く語り、「青編笠」との音連続を効かせている。

以上、山本版七行本と山本版八行本・菊屋版・稽古本との表記とその意味するところの違いについて述べた。表記と意味という点では、七行本の「阿呆」と「逢う」の掛け詞も可能であるが、語りという点では、「アアホー」と「アアフー」の両様で語る訳にはいかないから、疑問は残る。そこで、近松が鳥の鳴き声をどう描写しているのかをみると、

あほうがらすのがあくは「用明天王職人鑑」41ウ

泣くなくと泣くからす「丹波与作侍夜のこむろぶし」38ウ

つねにはかはいくと聞こよひのみへは其せつ生の恨のつみ。むくひくと聞ゆるぞや。「心中天の網島」42ウ

最初の例のみ、鳴き声を写したものであるが、あとの例は心情による描写である。七行本の「あはふ」も殊更「阿呆」との掛け詞とする必要もなく、「逢おう、逢おう」と鳴いているとしてもよいのではないだろうか。

三 語り方について

「三―一」清濁について

文楽における語りの伝承は非常に厳格であり、現行浄瑠璃では現在の清濁とは異なる初演当時の清濁を保った語りを聞くことがある。例えば「輝く」を「かがやく」でなく「かかやく」、「誰」を「だれ」でなく「たれ」と清音で語るなどは、語り手・聞き手の共通認識ともいえるものである。しかし、すべての清濁

が保たれている訳ではなく、語り手により清濁がまちまちの語もある。④ どういう基準で清濁が決まるのかが不明である。「冥途の飛脚」においては、清濁の選択はどうなっているのだろうか。

「淡路町の段」について検討する。

丹波屋からの使いの描写に、

④金子請とらふと立はだかつてわめきける。(山八3ウ・山

七・稽古)

金子請とらふと立はだかつてわめきける。(菊)

がある。現行浄瑠璃では「立ちはだかつて」(織・十)と濁音で語られる。

「はたかる」は『日葡辞書』『書言字考』とも、清音で、近松索引にも濁音例がない。⑤ また、近松よりあとの作品「尼御台由比浜出・伊勢平氏年々鑑・出世握虎稚物語」に「ふんばたかる」の例がある。ライマンの法則によると、後部成素の第二拍めに濁音節があれば、連濁しにくいから、連濁をおこなっているということとは、江戸中ごろまでは「ハタカル」と清音を保っていたことがわかる。復活上演されたころは、菊屋版のように「はだかる」と濁音になり、これを現行浄瑠璃も受け継いだのであろう。また、忠兵衛が家の様子を聞きたいと思っているところの描写で、

⑤外のぐめん内の首尾。心もくもでかくなはや(山八6オ・菊)

外のくめん内の首尾。心もくもでかくなはや(山七6ウ)

外トの工面へくめん内の首尾へしゆび。心は蜘蛛へくも

でかく繩へなはや(稽古)

これを現行浄瑠璃では「外のくめん内の首尾、心はくもでかくなわや」(織・十)と語る。

「工面」は「工面へクメン」ぐとにこり唱ふ。『浪花聞書』があり、また菊屋版に濁点があることから、復活上演当時は濁音であったのではないか。現行浄瑠璃で「クメン」と清音で語るの
は、漢字表記の稽古本の類を現在の読み方で語ったのだろうか。

ただし、ヘクモデカグナワ」と濁音で語る理由については不明である。確証があつて語っているのであればよいと思うが、そうでなければ清音で読むべきであろう。

なお、連濁であつたものを非連濁で語る例もある。

使いに対する手代の伊兵衛の言葉として

⑥あながしましういふまい(山八4オ・山七・菊)

あたかしましういふまい(稽古)

これを「あたかしましう」と清音で語る。

「あた」がつくことにより、連濁を起しているところから、

「あた」は、接頭語の性質をもっていた。連濁の形で語られなかったのは、「あた」の働きが、接頭的なものから副詞に変わってしまったからであろう。連濁形で語っても、非連濁形で語っても意味上に違いはない。

「三二」 「問屋」の読み

「淡路町の段」の丹波屋の使いの言葉に「米問屋」という言葉

がある。

江戸小舟町米どひ屋のかはせ銀。(山八3ウ)

江戸小舟町米問屋へこふなちやうこめどひやのかはせ銀

(山七4オ)

江戸小舟町米どい屋のかはせ銀(菊3ウ)

江戸小舟町米問屋の為替金へかはせぎん(稽古)

初演時・復活上演時ともへコメドイヤと読んだと思われる。近世期「問屋」は東西で異なった読み方がされており、「問屋へといや」江戸でとんやといふはなまり也『浪花聞書』とある。

しかし、現在浄瑠璃では大阪では訛であるはずのへコメドンヤと語られる(織・十)。

『現代日本語大辞典』(明治書院)によると現在でも大阪では「といや」で使用で、京都では「といや」が古く、「とんや」が新しいという。現在の大阪の若年層では「といや」は使用せず、「とんや」を使用するそうである。ごく最近の語りとして、稽古本にみられるような振り仮名のない漢字表記の本で読んだためにへトンヤと語られるようになったものか。

〔三一三〕文法変化

文法変化に伴う言い換えに次のものがある。

これも「淡路町の段」の丹波屋の使いの言葉であるが、

此中文を進しても返事もござらず。(山八3ウ・菊)

此中文を進しても返事もござらず。(山七4オ)

此中文を進しても返事もござらず。(稽古)

現行浄瑠璃は稽古本と同じで「進ぜても」(織・十)で語る。

サ変動詞から下二段動詞に変化するが、それを反映して「進じて」↓「進ぜて」は語りが変わったとみえる。しかし、すでに近松作品に連用形のみ「進じ」「進ぜ」の両方が使われている。

よびにしんぜた「夕霧阿波鳴渡」3ウ

こな様へしんぜたい「鍵の権三重帷子」17オ

壹貫め急度調へしんじませう「大経師昔曆」9オ

近松作品の連用形は「進じ」より「進ぜ」の方が優勢のようである。次第に他の活用に及んでいくことと、すでに近松時代に「進ぜ」優勢であることを考えれば、復活上演以降「進ぜて」と語られるようになったのは当然の改変であったと思う。

〔三一四〕読み違い

「淡路町の段」の

町まはりの状取立帰つて(山八・山七)

を現行浄瑠璃では

町廻りの状取り立て、帰つて(織・十)

と語る。「借金の取り立て」のように町を廻って手紙を取り立てる人がいて、それが帰ってきてということになるか。しかし、借金はともかく、手紙を取り立てるのはおかしいことであり、この語り方は納得いかない。稽古本をみると、

町廻りの状取立手返つて(稽古)

と、稽古本は捨て仮名「チ」があり、「町廻りの状取り」が「立ち返つて」と語らせたことがわかる。山八・山七には、「立」の上方に下げ胡麻があり、ここから新たに語り始めることを示し、稽古本と同様に「立ち帰つて」という語りを示すものである。現在には、「立ち帰る」よりも「帰る」が一般的であるうえ、「取り立て」という語があるところから、読み違えられたものが伝えられてしまったのであろう。

四 おわりに

かつて「冥途の飛脚」を復活上演したときに、本稿で述べた舞臺の変化などをどう考えていたのかはわからない。また、復活上演するときには清濁の面まで初演当時のものを再現する必要があるのか、意味の変化のあるものをそのまま語ってよいのか改変すべきなのか、いろいろな考え方があろうと思う。

「冥途の飛脚」に関しては、テープなどの普及により、若い太夫も同じ語りをしており、誤読と思われる語りもそのまま伝授されている。しかし、根拠のない清濁の選択や、意味の異なる改変には十分な配慮が必要に思う。また、テキストが漢字表記であるための誤読などは改めてはどうだろうか。

これまでの本文研究は、初演により近いものと、現行浄瑠璃のテキスト化が中心で、初演から何十年も経って、しかも浄瑠璃本出版が主でない本屋の丸本は見向きもされなかった。まして素人

八
向けの稽古本などは、名人といはれた三味線弾き書入れの朱（三味線譜）でもない限り、あまり扱われてこなかったのではないだろうか。しかし、初演と現在の語りを埋める資料としてもっと活用できると思われる。

(注1) 内山美樹子「近松作品と現行曲——演出の変遷と改作・復活の問題——」『近松への招待』岩波書店 平成元年 一月

(注2) a 『冥途の飛脚』桜楓社(昭和四四年) 頭注をはじめ、
b 『近世文学総索引 近松門左衛門』教育社(昭和六一年)も「せまい」を「狭い」と解釈する。

(注3) 坂梨隆三「ふ」を「ム」とよむこと——浄瑠璃本の場合——『国語と国文学』六二—五(昭和六〇年五月)

(注4) 連濁例ではあるが、「平家女護島」の二段めの語りでは、「めさしかご」「めざしかご」と太夫により語りに揺れがある。

(注5) 注2 bの総索引。

(注6) 『日本古典全集』昭和六年一〇月 「文政二年春」頃起稿、著者は江戸の人とみられる。

(注7) 注6に同じ。